海外協定校長期派遣留学報告書

氏名：宮城英明

学部学科名：国際食料情報学部　国際農業開発学科

留学先学校名：ジョモ・ケニヤッタ農工大学（ＪＫＵＡＴ）

1. 留学の目的

私が海外協定校長期派遣留学に参加し、留学先としてケニアを選んだ最大の目的は、私が所属する国際農業開発学科の講義で頻繁に取り上げられるアフリカ地域の農業や文化、人々について、現地で実際に見て、聞いて、議論しながら学ぶことでした。

国際農業開発学科の講義では、先生方の経験談や論文、ニュース記事などを通じて、アフリカについて学ぶ機会が数多くありました。そのような間接的な情報から学ぶことは、「このような事実があり、このような考え方があるのか」と、自身の知識や思考の領域を広げる上で非常に重要であると感じています。

しかし、インターネットや AI が発達した現代では、そのような情報は比較的容易に入手でき、誰もが学ぶことのできるものでもあります。そのような時代だからこそ、実際に現地というフィールドに足を運び、人々と直接かかわることこそ、大きな価値があると考えていました。

私が実際にケニアで生活し、自分が何を見て、何を感じ、何を考えるのかを確かめてみたい、そして、ケニアの人々、ケニアで活躍されている人々と関係を築いていく中でどのようなシナジーが生まれるのか、このような直接的で唯一無二の学びが本留学の大きな目的でした。

その他の目的は、「ビジネスチャンス」と「コーヒー」の二つをテーマにケニア留学に挑みました。

２０２３年の夏に短期留学として約１カ月間、同国のケニアに滞在した経験がありましたが、その時に感じたことがきっかけにあります。それは、「ケニアのような開発途上国では、人々に平等に与えられる選択肢や敷かれたレールは他の国よりも少ないが、何か新しいことに挑戦できる、そのような機会と好奇心に満ち溢れている地域である。」ということです。

前回の渡航は短期であったため、その気付きしか得ることが出来ませんでしたが、今回は１年という長期間の渡航なので、常にそういったワクワクするものを探しながら生活し、新しい発想を思いつき続けるという創造力を培う目的もありました。その思いつきが今後私のビジネスや人生に豊かさを与えてくれると思い、ケニアへの長期留学を決めました。

また、前回の渡航でコーヒー研究所を訪問し、コーヒー産業が世界経済に与える影響や、生産国におけるコーヒーの重要性について学び、この経験を通じて、コーヒーについてさらに専門的に学びたいという思いが強くなりました。

日本ではコーヒー豆専門店でアルバイトをしており、消費国の視点から、消費者が求めるコーヒーや品質について学ぶ機会を得ていましたが、生産国の視点については十分に理解できていないと感じていました。

そこで、コーヒー生産国であるケニアに渡り、栽培から収穫、精製、流通、輸出に至るまでの一連の工程を現地で学び、研究したいと考えました。そして、生産国と消費国の双方が抱える課題やニーズを理解し、その情報を相互に発信・共有する

ことで、両者の相互理解や持続可能なコーヒー産業の発展に貢献できるのではないかと考えるようになり、それを実現するためには、コーヒー農家と直接的に関わり合い、コーヒーに関する様々なセクターで現場から多くのことを学ぶことが出来る本留学が必要不可欠でした。

2. 現地での生活について
（住居、キャンパス、友達との交流、余暇の過ごし方など）
・住居（家賃６５００ケニアシリング/１カ月）
住居は大学の中にある留学生用の寮で生活していました。ケニアに来てからの半年間は、バングラディシュ人やドイツ人、ルーマニア人の学生たちとの共同生活で、宗教や文化の違いなどから、トイレやキッチンの使い方で少し不自由な部分がありましたが、「嫌なことは嫌と言う」ということを徹底して、お互い許し合いながら生活することが出来たと思っています。リビングで音楽を流してみんなで踊ったり、庭で焚火をしたり、通貨交換をしたり、非常ににぎやかで楽しい寮生活だったと思います。
留学が半年経過したころの２月からは、ルームメイトが皆帰国してしまい、広い寮で１人暮らしをしていました。１カ月おきにエチオピアから、エリトリアから、研究者の方が泊まりに来ていたので多少文化交流する機会がありましたが、私も彼らも忙しい時期だったので、お互いあまり干渉せずに共同生活を終えました。
住居関連で苦しい思いをしたことが「水道」と「電気」です。水道はまず飲めないのは当たり前で、乾季になると断水することもありました。断水の頻度は校内にダムがるので稀ですが、食器が洗えなかったり、洗濯できなかったり、お風呂に入れなかったり、非常にストレスでした。
電気に関しては頻繁に停電します。電線が何かに接触して停電したり、工事で一時停電していたり、最初はあまり慣れませんでしたが、留学後半からは停電に慣れ、夜は蝋燭に明かりを灯し、原始的な生活を送っていました。停電するとあたり一帯が真っ暗になるので星がきれいに見えます。しかし、雨季にＪＫＵＡＴの校内が洪水し、近所の電柱が倒れてしまった時は１週間の電気無し生活を強いられて、非常に苦しい思いをしました。洪水しているので食料も買いに行けず、スマホやＰＣは満足に充電できず、シャワーもお湯が出ず、蝋燭の明かりだけでの１週間は苦しかったですが、一番途上国らしい生活を経験することができ、私の人生を少しだけ色濃くしてくれました。
これらの経験を通じて、水道や電気などのインフラが安定して利用できることは当たり前ではないことを実感したと共に、生活基盤を支えるインフラ設備の重要性を学びました。
帰国寸前に他の住居に空き巣が入ったという情報を聞きましたが、「水道」と「電気」を除けば、私が住んでいたＤ７は最高の住居です。

・食事
ケニアで伝統的な料理と言えば、「ウガリ」です。ウガリはメイズ（トウモロコシ）の粉から作られたケニアの主食で、味はほとんどなく、お肉や油で炒めた葉物野菜と一緒に食べます。お餅のような触感ですが、味が無いので、美味しさを目的に食べるのではなく、お腹を膨らませるために食べる、そのような印象でした。留学の

最初の半年間はこのウガリを好んで食べたり、作ったりしていましたが、レストランや食堂で出てくる付け合わせのスープは毎回同じ味なので、途中で飽きてしまい、後半は日本食を作って食べていました。

ケニアの他の食べ物と言えば、チャパティ（ナン)、チップス、マンダジ（揚げドーナツ)、サモサ（揚げ餃子）などもありますが、どれも油ものばかりです。ケニア人はお米を炊く時にも大量の油を入れるので、脂っこすぎてケニア料理はずっとは食べていられません。意外にも、アフリカ人の肥満人口は増加傾向にあるのですが、それに納得するような食事環境でした。

買い物に関しては、大学の隣に野菜やフルーツが買える大きめの市場があります。そこで1週間に一回食材を仕入れていました。キャベツ５０シリング（６０円）やパイナップル１００シリング（１２０円）など、野菜とフルーツは非常に安く購入できるので非常に助かります。

特にマンゴーが好きだったので、1 月頃のシーズンになると市場で大量のマンゴーを買い、毎朝マンゴーを丸々１個かじる期間もありました。また、ＪＫＵＡＴ中にマンゴーの木が生えているのでケニア人の友人と採りに行ったりもしました。

心配していた食あたりは１年で３回ほど経験しました。原因は町にあるストリートフードだと思われますが、一回かかると３日間ほど発熱・下痢・吐き気・嘔吐・食欲低下に見舞われます。病院に行く体力が無かったので、毎回寝込んで治しました。ケニアの露店やレストラン、食料品店の衛生環境や衛生基準については改善するべき問題は山ほどあると思うので、ケニアが今後発展していく中で「美味しい食事を健康的に食べる」、そのような食環境を実現してほしいと思います。

・キャンパス

キャンパスはケニアの首都のナイロビから車で４０分、空港から１時間かかるジュジャという町にあります。ジュジャは大学が出来てから発展した町で、学生向けのお店や集合住宅が集まっています。普通に生活する分にはジュジャ内で必要なものを揃えられますが、娯楽や快楽を求めるとなると、ナイロビまで行かなければ何もありません。私はジュジャのトレーニングジムに通ったり、ＪＫＵＡＴ内の公園でトレーニングやランニングしたり、暇をつぶしていました。毎日のストレス発散にもなり、心身共に留学前よりも健康的になり、非常に良い生活習慣を送ることが出来ていました。

キャンパスの広さは２０５ヘクタール、東京ドーム４４個分の広さです。とてつもない広さのＪＫＵＡＴのジュジャキャンパスには、農学部と工学部など計５つの学部のそれぞれの研究棟や授業等、フィールドを有しています。ややこしい話ですが、ＪＫＵＡＴのジュジャキャンパス内に別大学を有しているほど、土地に余裕があり、ケニア人学生は自転車やローラースケートなどで移動しています。

私が所属していた農学部は、授業等、研究棟、ファーム、畜舎など一番広く土地を利用しており、実習や教室の行き来はとても大変でした。土地が広いので、栽培実験や施肥実験をするための試験場をしっかり確保することができるため、農学研究するにはケニアで一番の大学と言っても過言ではないでしょう。

学習用施設以外にも、学生寮や食堂、運動場、プールもあり、建物は古めですが、充実したキャンパスライフを送ることが可能です。

・授業、テスト

授業については、留学生の自分は所属している農学科が開講している授業の中から自由に受講科目を選ぶ方式でした。学科名は農学科ですが、動物に関する授業や法律、歴史、農業機械についての科目もあり、留学前までは馴染みのかった科目に挑戦することも可能です。

授業の日程は特に決まっておらず、前日の夜にクラスリーダーから次の日の予定表が送られてきます。授業は１コマ最大で３時間、早い時で朝７時から始まり、終わりは１８時になることもあります。私はケニア学生よりも少ない授業数だったので、ギリギリ耐えられていましたが、ケニア学生は開講されているすべての授業の単位を取得しないと進級できないため、最大で１日４コマというようなハードな学生生活が印象的でした。また、各授業、毎週のようにレポートや小テスト、発表課題が出るので授業外でも授業のために多大な時間を割く必要があります。私は前期５科目、後期は就活や研究のために履修した科目は１科目でしたが、ネイティブほど英語で読み書きできるわけではないので、前期は空き時間のほとんどは課題やテスト勉強に時間を費やしていました。

授業の方法は、先生が喋って、それをノートに書き写していくディクテーション方式でした。たまにプロジェクターで授業資料を映してくれる先生もいましたが、喋るだけの先生がほとんどだったので、ついていけずに同級生にノートを毎回見せてもらっていました。学生は文字を書くことに気を取られて授業１回で内容を深く理解することが出来ませんし、授業時間が３時間となると学生は集中が切れてしまっている様子で、日本と比べて非常に非効率な授業スタイルだったので、何が良くてそのような授業スタイルをとっているのかずっと疑問に思っていました。

テストについて、テストは合計で４つあります。開講期間内の小テスト３回と期末テストです。どれも記述式なので、問題に対して知っている情報をひたすら記述することを心掛けていました。テスト範囲が非常に広いですが、同級生の力も借りて勉強会を開くなどしてもらい、期末試験に挑みました。

・友人との交流

ケニア人の友人とは、良くも悪くも、これまでの人生では経験したことのないさまざまな交流をすることができました。私は２年前にもケニアを訪れた経験があったため、今回の渡航直後は、その時にできた友人からケニアでの生活の仕方について教えてもらっていました。家でお茶をしたり、買い物に連れて行ってもらったりするなど、最初は良好な関係を築くことができていると感じていました。

しかし、お互いに少しずつ気を許すようになるにつれて、その関係性は次第に変化していきました。きっかけとなったのは、友人からのさまざまな要求でした。「スマートフォンを充電したいから家（寮）に入れてほしい」、「疲れたから家（寮）で休ませてほしい」といった要求が徐々に増えるようになり、最終的には「留学に行きたいから、一時的にお金を貸してほしい。後で返すから」と言われるまでになりました。

留学前から、ケニアでは外国人に対して金銭的な援助を求められることがあると聞いていました。しかし、実際に自分が信頼していた友人からそのような要求を受けると、想像していた以上にショックを受けました。「自分は友人としてではなく、外国人、そしてお金を持っている人間として見られているのではないか」と感じ、

ケニア人との友人関係を築くことに対して、以前よりも慎重になりました。
さらに後から知ったことですが、一度ナイロビで催される日本人会にその友人を招いた際には、日本人にＳＮＳの交換を強く要求したり、私のＳＮＳを介して日本にいる私の友人たちに低俗なメッセ―ジを送ったりと、私の周囲の人たちにも迷惑をかけていたことが分かりました。その友人には自分の気持ちをしっかりと伝えて、今は絶交しています。
他にも、授業が始まったばかりの時期にクラスメイトから、「オンラインでお金を稼げるインターネットサイトがあり、日本のパスポートや住所を貸してほしい」との要求。はたまた、留学生を管理しているＪＫＵＡＴの職員から、「家族の誕生日プレゼントを日本のオンラインサイトで購入したいからＰＡＹＰＡＹアカウントを貸して欲しい」との要求。そのあともケニア人からの金銭的な要求や私欲的な要求が後を絶たないので、私はケニア人を、その人が誰であろうと信用しないと決めました。知識も経験もある大人が下心丸出しで近づいてくることを本当に不快に思い、ケニアの街に良くいる物乞いの子供達の方が純粋でストレートに要求してくるので、そちらの方がましに見えてきます。このような大人たちがケニアを支えて良いのか疑問に思うと同時に、技術や経済的な発展ともに人々も成長していかなければならない、そんな風に思うようになりました。
中々信用するのは難しいですが、親切で、純粋なケニア人も中にはいます。今回の留学でできた同じクラスの友人なのですが、授業や課題の際に、英語があまり得意ではない自分を助けてくれたり、自分にケニア文化をもっと深く知ってもらおうと遊びに誘ってくれたり、なんと休暇期間にはケニア山周辺の彼の実家まで連れて行ってくれたり、特別な体験をさせてくれました。他のクラスメイトも親切で、ノートを見せてくれたり、ご飯に連れて行ってくれたりと、日本の学生生活と同じような交友関係を築くことが出来ました。
人を信用するかしないかの判断能力や嫌なことはしっかりと言う能力はこの留学で身に付いたと思います。

・余暇の過ごし方
平日暇な時はジュジャのトレーニングジム、土日はナイロビへ、長期休暇や連休の期間は遠地へ旅行に出かけることが多かったです。
前述しましたが、ジュジャでは娯楽がほとんどないため、頻繁にナイロビに出かけていました。ナイロビへ行く際はジュジャとナイロビ間のマタツ（バス）があるため、慣れればスムーズに行き来することが出来ます。ナイロビのマタツ乗り降り場がＣＢＤというとても治安の悪い場所にあるのですが、気を強くもっていれば問題ないです。
ナイロビで月に一度日本人会があるのですが、そこで交流を広げていくことがケニア生活で有意義な時間だったと思います。協力隊、ケニアでビジネスをしている方、旅行客、学生など、様々な人が集まるこの会で、アイデア交換やケニアについて語り合うことが非常に楽しかったです。ケニアを選んで来る人達は、良い意味でおかしな人たちで、日本にいるとなかなか出会わない方たちです。常に新しいことをしようというクリエイティビティや思いついたらすぐ行動にせるような行動力に富んだ方たちで、日々刺激をもらいながら、それをケニア生活の活力にしていました。とても面白い方たちです。そこで知り合った人たちとフットサルをし、食事

会やナイロビ散策、旅行にも行っていました。
ナイロビへ１人で出かける時は、ほとんどがコーヒー屋巡りです。ケニアはコーヒーの生産国ですが、自国でコーヒーを消費する文化はなかったのですが、近年ではナイロビを中心においしいスペシャルティコーヒーを提供するお店が増えてきているらしいです。それは、コーヒー好きの私からしたらとても幸せなことで、ナイロビのコーヒーショップでコーヒー豆を買い、寮でコーヒーを淹れて飲む、ケニアでのコーヒーライフを満喫していました。ナイロビのコーヒー屋は制覇したので今はナイロビのコーヒー屋を紹介するＷＥＢサイトを作っています。
遠地へは、旅行は国立公園やケニアの沿岸部へよく行きました。国立公園や政府が管理している施設は学生ビザを取得すると安く入場できるため、学生ビザを乱用して、コスパ良く旅行できます。国立公園では野生動物を観てケニアを感じ、沿岸部には白い砂浜の奥にターコイズブルーの海が広がっており、海鮮料理も楽しむことが出来ます。ケニアは行く場所によって文化や信仰宗教、部族が異なるのでケニア国内だけで１年間を十分満喫することが出来ます。
また農大の大学院から協力隊でケニアに赴任されている同学科の先輩の任地へ伺い、協力隊員の方がどのような心持ちでどのように活動しているのか視察させていただく機会がありました。私が所属している国際農業学科の講義で青年海外協力隊のお話は良く耳にするので、その活動を直に視察することができたのは、座学からは絶対に得られない学びだったと思います。
他には調査＋冒険としてコーヒー農園を巡っていました。ナイロビ周辺からコーヒー栽培が最も盛んなケニア山周辺まで、訪問できそうなコーヒー農園は片端から伺っていました。地域や農園の規模によって栽培方法や加工方法が異なるのでその違いを比べたり、何より、日本ではほど遠く感じていたコーヒー生産者の方と会話ができたり、生産者と生産地を想いながらコーヒーを飲むことでより私のコーヒーライフが豊かになったような気がします。
学校が落ち着いてからは、ジュジャから２０分の場所にあるコーヒー研究所でインターンシップをさせていただきました。アフリカでも最高峰のコーヒーの研究施設で、コーヒーに関する育種学や栽培学、そして経済学について深く学び、学者やコーヒーの生産者とコミュニケーションをとりながら、ケニアのコーヒー事情とトレンドについて知ることが出来ました。とても有意義なインターンシップだったと思います。

3. 留学を通じて学んだこと
前回のケニアへの渡航は短期だったので、ケニアの良い部分しか見ることができず、ケニアを成長し続けている国だとポジティブな意味で勘違いしていた自分がいました。実際に長期で滞在してみてみると、ケニアの悪い部分が浮き彫りになり、同時に本当に良い部分に気が付くことが出来ました。

・イメージとのギャップ
私がケニアに留学した理由の１つとして、「発展途上国の現状を自分の目で知りたい」という目的がありました。留学前の私は、途上国と聞くと、貧困や未発達な暮らし、世界の発展から取り残された地域という漠然としたイメージを持っていました。そしていつか自分の力で困っている人々を支えられる人間になりたいと考え

ていました。しかし、実際のケニアは私の想像とは大きく異なっていました。
都市、ナイロビには近代的な高層ビルや大型ショッピングモール、レストランが立ち並び、世界中の企業や人々が集まっています。一方で、少し郊外へ足を延ばせば、水道や電気が十分に整っていない地域や、教育や医療へのアクセスが限られた人々の暮らしも存在していました。同じ国の中に先進的な都市と未発達な地域が共存しているという現実に強い衝撃を受け、日々「格差」について考える生活をしていました。
また、スラム街でのツアーやボランティアに参加する中で、貧困の中で暮らす人々は、私が想像していたような「かわいそうな存在」ではなく、厳しい環境や経済的な制約がある中で、知人や家族などの肩書や関係性に捉われずに、助け合い、笑い合い、力強く生活していることが印象に強く残っています。そんな彼らを助けたい、支えていきたいと思っていた私ですが、助けられているのは自分の方で、彼らからは、困難な状況でも前向きに生きることの大切さや、人と人が支え合う精神を学び、日々多くの元気と勇気をもらっていました。
都市部では経済発展が進み、人々は仕事やお金、娯楽を中心とした生活を送っています。一方で、郊外や田舎では、物質的には豊かではないものの、家族やコミュニティとのつながりを大切にし、小さな幸せを分かち合いながら暮らす人々がいました。同じケニアでありながら、そこには全く異なる豊かさの形が存在していたのです。
私は留学前、「発展すること＝より良いこと」だと考えていました。しかし、この一年を通して、本当の豊かさとは何なのか、どちらの生き方が正しいのか分からなくなる瞬間が何度もありました。このイメージと現実のギャップこそが、私の価値観を最も大きく変えた学びだったと感じています。

・なぜアフリカは発展しないのか。
ケニア到着後すぐにストライキで２カ月間大学が休校になりました。原因は政府が大学教員への給料未払いでした。その時感じたことは、「政府が腐りきっている」ということです。私が通うＪＫＵＡＴは国立大学なので、教育機関のストライキをもろに受けましたが、ほかにもケニアでは空港や医療機関で頻繁にストライキが起こります。いずれも原因はケニア政府です。
もし、デモや暴動などの直接的な行動をとると、軍や警察の力で強引に制圧され、政府機関で働く人たちはストライキという行動をとらざるを得ないのです。政府関連機関はいずれもインフラストラクチャーとして人々の生活、経済活動と密接に関わっているため、それらの期間が麻痺してしまうと、どうしても国民に悪影響を与えてしまいます。
もちろん声を上げることも自分達の生活を守るために大切な行動ですが、ケニア国民はストライキに妙な正義感と抱いており、ストライキを正当化し、ストライキを起こすことが当たり前というような感覚で、インフラストラクチャーが機能不全になっても関係ないのです。そうなると、ストライキの期間は一部ではありますが、国家として生産性の無い状態になってしまいます。
５月頃、中東情勢が悪化した際、ケニアでも燃料価格が高騰しましたが、そんな時もケニア国内全体でストライキが起き、交通機関が止まり、お店も開かない日がありました。生活が苦しくなったことに対して国民が声を上げること自体は理解で

きます。しかし、その結果として経済活動まで停滞してしまえば、国民自身の生活をさらに苦しくするという悪循環に繋がってしまうように感じました。このストライキに関しては、政府と国民の両者にとっての利益はなく、ここでアフリカが発展しない理由の一つを明確化することが出来たと思います。

アフリカが発展しないもう一つの理由として、ほとんどの国民にテイカー（何かを一方的にもらう人々）としての精神が根付いていることが原因にあるのではないかと考えています。前述の友人関係にもありましたが、最初の行動で何かをもらおうとする、搾取しようとするような動きや会話をしてきます。

例えば、街中や学内であっても、外国人である私に対して物乞いや働く場、恋愛関係を求めて友人を紹介してほしいなどの一方的な要求を激しく受けます。もちろん何かを与えることもできましたが、こちら側のメリットはなく、もしこの要求に応えたとしたら、今後、彼らは甘い蜜を吸うように他者から与えられるものに依存してしまうと考え、私は常にそういった要求を断っていました。「心が貧しい」という表現が適切かは分かりませんが、人間関係よりも利益や見返りが優先される場面に、私は強い違和感を覚えました。

また、学校や街中では、アジア人である私に対して差別的な言葉を投げかけられることもあり、不快な思いをする経験も少なくありませんでした。都市部では、金銭的な要求や物乞い、差別的な言動に遭遇する機会が多かった一方で、郊外や地方では見返りを求めず親切に接してくれる人々にも数多く出会い、その温かさがとても印象に残っています。

この対照的な経験から、私は都市部ではお金や利益、娯楽を優先する価値観が広がる一方で、郊外や地方に残る「人を思いやり、見返りを求めず助け合う」というケニアの温かい文化が少しずつ失われつつあるのではないかと感じました。そして、その背景には急激な経済発展や都市化によって生まれた格差社会の影響があるのではないかと考えています。

このまま現在の発展のあり方が続けば、ケニアが本来持っている「互いに助け合う文化」が薄れ、人と人とのつながりよりも利益や他者への依存が優先される社会になってしまうのではないかという危機感を抱きました。経済発展だけでなく、人を思いやる文化やコミュニティの豊かさを守ることも、持続可能な発展には欠かせないと感じています。

そして、ケニアの国民だけではなく、国自体も他者依存に陥っているのではないかと思う節は多々あります。ナイロビ中心部や地方都市部は中国資本や外国からの資本により、インフラストラクチャーが整いや高層ビルが立ち並び、ほしいものは何でも手に入ります。一方で、少し都市部から離れた場所に行けば、コンクリートを積み上げたような無骨な家が建ち並び、道路は整備されておらず、道端には大量の廃棄物と物乞い、外国資本によって発展した都市部とケニア政府による手つかずの郊外や田舎地域の差は非常に大きいものでした。

この差をみれば、ケニアがアフリカの中でも先進的と言われているのは見せかけであり、外国政府や企業の介入が無ければ発展できていなかったと言わざるを得ません。今後は外国から仕入れた知識や技術力を維持して、発展させていく持続可能性がケニア、そしてアフリカ全体のさらなる発展に必要不可欠だと思いました。

かなり批判的な話になってしまいましたが、ケニア人にも、対価を求めずに私を助けてくれたり、気さくに話してかけてくれたりするような心が豊かな方たちは大

勢います。そういう方たちに対しては相互扶助として一緒に何かをしてみたいと思うことがありましたが、まだ無力なわたしはそれに応えるしかありませんでした。また、自分で事業を立ち上げ、やりたいことを必死にやっている方からは日本では得られないようなエネルギーを感じ、日々刺激をもらっていました。

そのような方たちが増えていけば、ケニアは益々発展していくポテンシャルがあると思うのですが、未だに教育や健康的な生活が保証されず、ケニア人全員が平等に挑戦できる機会が少ないため、ケニアが持続可能に発展していくためには、そのような課題をクリアしていく必要が前提にあると学びました。

・途上国だからこその強み

途上国だからこその強みは、エネルギーとワクワクに満ちていること、そして成長できる可能性が無限大にあることです。

世間一般ではありますが、日本で暮らしていれば、生まれた瞬間から人生のレールがある程度敷かれており、親や学校の教員、周囲の人々から示された選択肢を選びながら、大きな不自由を感じることなく生活することができます。私自身もそのレールの上を歩んできた一人であり、この留学でさえ、自ら決断したとはいえ、与えられた選択肢の中から選んだ道でした。

しかし、日本とは全く異なる環境のケニアで暮らしてみると、日本の豊かで整った生活のありがたさを実感する一方で、日本には「自由であるはずなのに、見えないレールや周囲の期待によって選択肢が狭められている」という、自由の中の不自由さがあることに気づかされました。

ケニアでは、人に会うにも勉強するにも、自ら行動を起こすことがすべての出発点です。私もコーヒー産業を学ぶため、同級生や青年海外協力隊の方々に紹介をお願いし、ＳＮＳで農家へ直接連絡を取りました。その結果、多くのコーヒー関係者と出会い、農園や農協で調査活動を行うという目標を実現することができました。

この経験を通して、機会は与えられるものではなく、自ら行動することで切り拓くものあり、そして自分の人生を自由に創造していく楽しさに気が付くことができました。

また、現地のケニア人、ケニアで活躍する日本人や他国籍の人々からも、自由を楽しみ、挑戦し続けるワクワクとエネルギーを常に感じていました。新しいビジネスを始めたり、人との出会いを生み出すコミュニティを立ち上げたりと、多くの人が自ら機会をつくり出しています。

私が感じたケニア、そして途上国の強みは、環境が整っていないからこそのワクワクとエネルギー、そして挑戦することを恐れず、挑戦する人を周囲が自然と応援してくれる文化にありました。また、まだ誰も手をつけていない課題や可能性が数多く残されており、途上国には新たな価値を生み出せるブルーオーシャンが広がっています。その環境に身を置いたことで、私自身も「まずはやってみよう」と一歩踏み出せる人間へと成長することができたと実感しています。

4. 留学経験を今後どのように活かしていきたいか

今回の留学を通じて、私が最も大きく得たものは、「現場で学ぶ姿勢」と「自ら行動して機会をつくる力」です。今後もこの姿勢と行動力を大切にし、常に新しい価値観や人々との出会いを求めながら、自らの可能性を広げていきたいと考えていま

す。
　私は将来、コーヒーに関わる仕事に携わり、コーヒーを通じて人々に豊かさや楽しさを届けられる人間になりたいと、この留学生活を通して強く思うようになりました。生産国であるケニアで学んだ経験と、日本で消費国の立場から学んできた経験の両方を生かし、コーヒーを通じて人と人、地域と地域をつなぐ仕事に挑戦していきたいと考えています。
　また、その延長線上で、ケニアで目の当たりにした開発途上国の課題にも向き合い、現場で得た学びを生かしながら、持続可能な社会や地域の発展に貢献できる人材を目指したいと思います。
　具体的な将来像を掲げましたが、それ以上に大切にしたいのは、ケニアで感じたワクワクやエネルギーを忘れないことです。日本では周囲の空気や同調圧力に流されそうになることもありますが、ケニアで親しんだ 「Hakuna Matata（どうにかなる)」 の精神を胸に、自分らしく新しいことへ挑戦し続け、人生をより豊かで楽しいものにしていきたいと思います。
　この１年間の留学は、私に知識や経験だけでなく、人生の価値観そのものを大きく変えてくれました。この経験を原動力に、挑戦を楽しみながら社会に貢献できる人間へと成長していきたいと考えています。
　また、この留学経験を自分だけのものにするのではなく、より多くの人々と共有していきたいと考えています。ケニアという国に長期留学する人は決して多くありません。だからこそ、私自身が現地で経験したことや、そこで出会った人々、文化、そしてケニアならではの魅力や楽しさを、より多くの人に知ってもらいたいと思っています。今後は、ＳＮＳやＷＥＢサイトなどを活用した情報発信にも積極的に取り組み、ケニアに興味を持つ人や、海外へ挑戦してみたいと思う人を１人でも多く増やしていきたいです。
　この１年間で得た経験や気づきを、自分自身の成長だけで終わらせるのではなく、誰かの新しい１歩を後押しするきっかけへと変えていくことも、今回の留学経験を活かす１つの方法だと考えています。